

32. 農家はだれも道具持ち

農家の納屋をのぞかせてもらうと、たとえば鍬なら6～7本は出てくる。さすが農業の専門家と脱帽の場面だが、歴史的に見れば長い長い苦勞の到達点といえよう。

納屋の農具を拝見

A は千里丘東のTさん宅の納屋から農具をもらい受ける時のスナップで、左から堆肥を運ぶのに使うフォーク、オウコ（杓、天秤棒）、回転除草機、カキ（田草掻き）、ツルハシ（鶴嘴）、スジキリ（筋切り）、ジョウレン（鋤簾）は竹簀つきから総鉄板まで4本の品揃え、カナグワ（金鍬）が広い型と標準型の2本。

B は千里丘のさん宅。左からチョンガ（手斧鍬）、バチ（撥鍬）、ビッチュウ（備中鍬）、ジョウレン（鋤簾鍬）、サラエコ、風呂鍬、カナグワ（金鍬）。

これらのAもBも、もちろんその家の所持農具のほんの一部にしかすぎない。

中世農民の農具リスト

C は中世、南北朝～室町時代の農民の財産目録で、黒田日出男氏が中世農民の3つの階層をあざやかに示された表から、家畜と農具の部分だけを抜き出した。

中世では土地の使用権や土地管理の上下のポストをめぐる争いは日常的なもので、被害届けや差押え品のリストとして財産目録が作成された。これが庶民生活の史料となる。

兵衛二郎は自作農

口の兵衛二郎は牛を1頭飼って農具も1通りまんべんなく揃えており、家族労働を中心に農業経営を展開する自作農で当時の標準的農家と考えられている。

中世の地主と小作

イの泉大夫は牛を3頭飼っており、表では略したが家財の中には畳5畳に茶臼・茶碗があり、くつろいで抹茶をたしなむ地主さんであると考えられるが、鍬はもっていない。

その反対にハの黒神子（くろみこ）は鍬はもっているが、牛も犁も馬鍬もない小百姓である。小百姓は鍬をたずさえて地主のもとで働いたのだと黒田氏は推定している。

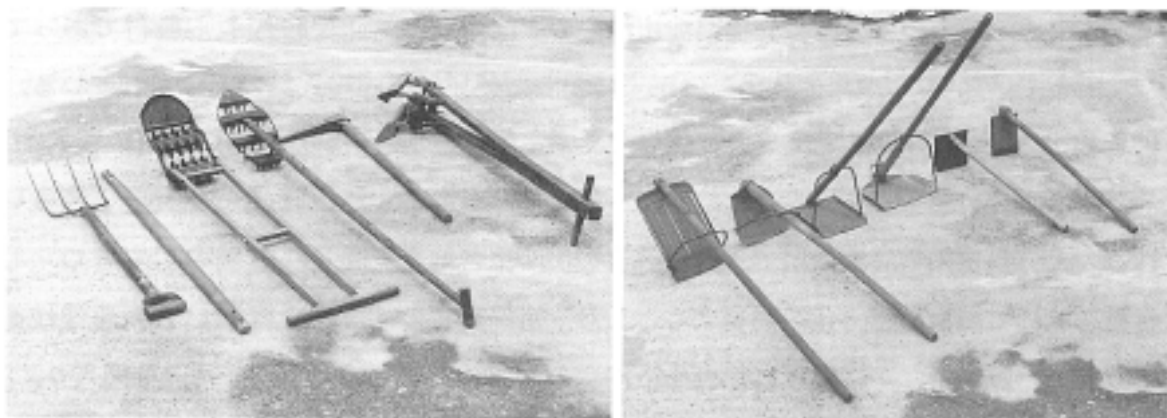
それにしても鍬は1～2本で草削りも筋切りも鋤簾もなく、農具は数も種類も少ない。

見直したい江戸時代の経済成長

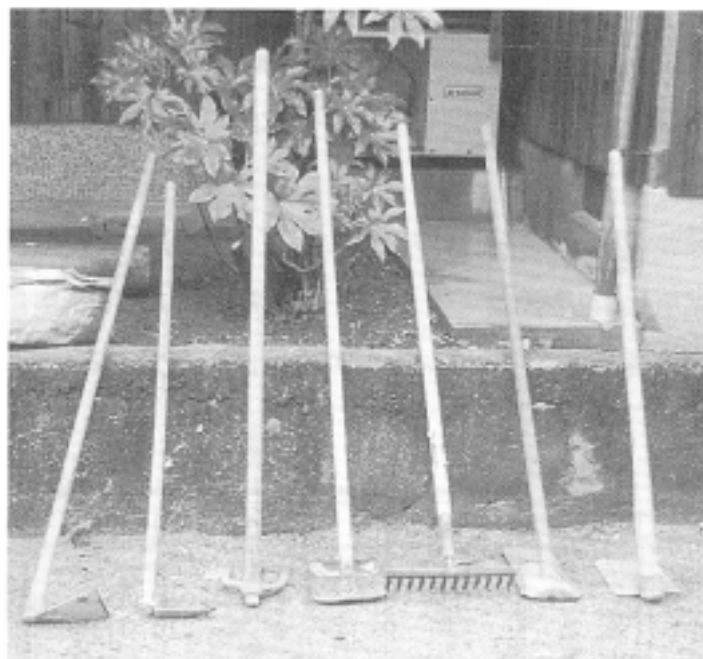
D は江戸時代の『農具便利論』（1822）。鋤簾も用途に応じて多様化している。1軒の農家が何種も揃える時代がきたのだ。農家の道具持ちはこの伝統を引き継いでいる。

百姓が高い年貢で苦しんでいたのも一面だが、百姓が物持ちになり始めるのもこの時代である。江戸時代は、民衆経済が飛躍的に拡大した時代でもあったのだ。

A



B



D



C

中世農民の資産公開

名前	イ. 泉大夫	ロ. 兵衛二郎	ハ. 黒神子
地域	若狭国太良荘/1450年	山城国上野荘/1425年	若狭国太良荘/1347年
家畜	牛 3	牛 1	
農具	からすき(犁) 1 むまく口(馬鍬) 1 (わ) すりうす(摺臼) 1 つきうす(搗臼) 2	からすき(犁) 1 うまくわ(馬鍬) 1 くわ(鍬) 1 まさかり(鉋) 1 すりうす(摺臼) 1 つきうす(搗臼) 1 きね(杵) 3	くわ(鍬) 2 まさかり(鉋) 1 手斧 1